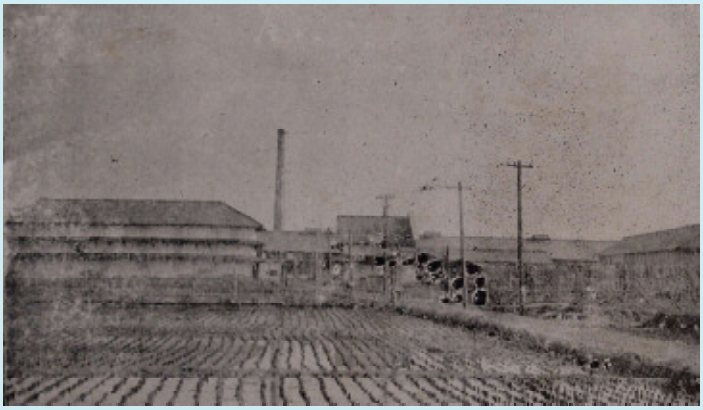
尾北地方の絹産業②－製　糸－

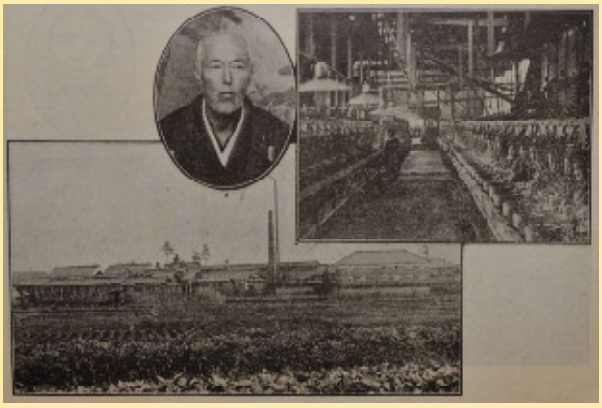
尾北での製糸－繭から糸を取る－は、江戸時代、手挽（てびき）で行われてきたが、明治初めに信州から座繰（ざぐり）法が伝播し、続いて器械製糸が急速に広まった。１８９３年（明治２６）に丹羽郡・葉栗郡内で８４箇所を数えた製糸場（１０釜以上）は、その後、景気変動や大規模化により減少傾向で変動していくも、生糸の生産量は増大し、１９３０年（昭和５）の生産量は１８９３年の５倍を超えた。

木曽川製糸(株)木曽川工場　　出典：『葉栗郡紀要』

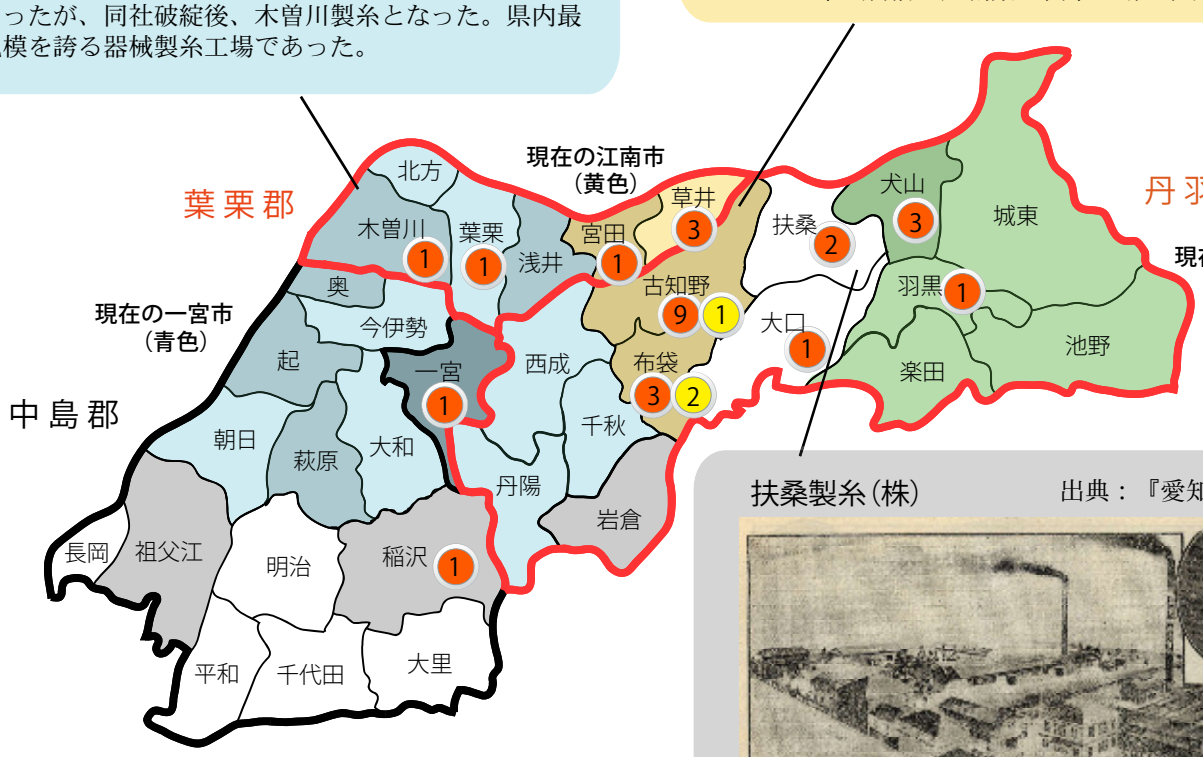


１９１０年（明治４３）開場の山十組（長野県諏訪郡）の分工場であったが、同社破綻後、木曽川製糸となった。県内最大級の規模を誇る器械製糸工場であった。

早川製糸場　　出典：『愛知縣人士録』



１８６８年（明治１）創業の製糸工場。古知野町。

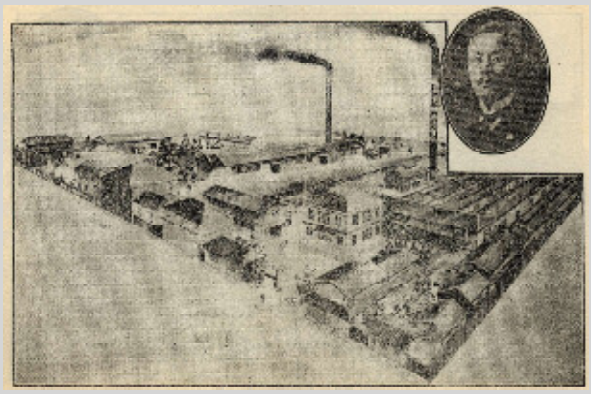


尾北地方の製糸場（昭和５年）

器械 製糸　　玉糸 製糸

※釜数10釜以上の製糸工場、生糸共同場返所、生糸共同荷造所
『第十二次全國製絲工場調査(昭和五年度)』（1932）より作成
岩井章真作図

扶桑製糸(株)　　出典：『愛知縣人士録』



１８６３年（文久３）創業。犬山・西春に分工場を擁したが大正末期に営業を止め、１９２９年（昭和４）に組合製糸・昭和館へ引き継がれた。